



【写真提供】 東海新報社

地域連携

「つなぐ」ことで より確かな支援を

「緊急支援」の次の活動は、地域と地域とをつなぐこと。
人々のまちの「これから」への歩みを力強くする支援であり、
「まつり」「ボランティア・コーディネート」「現地雇用」の
3点に着目し支援をすすめました。

1 おまつり支援



大船渡市盛町の七夕の様子



炊き出しやお茶会など、被災地のさまざまな方とお会いする中で聞こえてきたこと。それは「今、おまつりをしたい」という声でした。震災前から代々地域で受け継がれ守られてきたおまつりは、鎮魂の意味や明日への活力を生み出すために必要です。愛知県だけでなく全国・全世界の皆さんの資源を活用させていただき、おまつりを支援しました。

スタッフ派遣、物資提供など多面的に強力 出会いと交流から生まれた「地域連携」

岩手県大船渡市で毎年夏に開催されている「盛町灯ろう七夕まつり」。明治時代から続くこの伝統行事には、各地区の山車や竹飾りを楽しもうと多くの人々が訪れます。震災でイベントの中止や自粛が相次ぐ中、同じ愛知県安城市の安城七夕まつり協賛会から支援の申し出がありました。「安城七夕まつり」は「日本三大七夕」に称される大規模な七夕まつり。この安城から、竹飾り用のくす玉の贈呈やボランティアスタッフの派遣などが行われることとなり、盛町夏まつり実行委員会や盛青年商工会と、安城七夕まつり協賛会とをつなぎ合わせる役目を果たしました。

8月6・7日に行われた「盛町灯ろう七夕まつり」では、安城七夕まつりから送られたくす玉(2011年は約60個)を含む53本の竹

飾りが登場、設置作業にも安城からのスタッフが協力しました。安城の名物イベントである「願いごと短冊」で励ましのメッセージが書かれた短冊(2011年は約500枚)を展示したり、来場者に願いごとを書いてもらいました。同じく名物の「願いごとふうせん」は、安城七夕と同時開催で行われました。住民の夢や復興への願いが書かれた風船約3,000個が放たれ、映像を通じて感動を共有しました。ステージイベントでは、現地と愛知県の高校生による太鼓演奏や合唱などのコラボも実現しました。このように、ボランティアやイベント専門スタッフの派遣、スタッフTシャツやステージ関係設備をはじめとする物資の提供、運営マニュアル作成など多面的な協力を展開。地元の方々と他地域からの来場者が一帯となった「地域連携」をも生み出しました。

2011年は地域連携の色合いが強い「北東北三大まつり」でも実行委員として招聘され、側面からまつりをサポートしました。



住田町夏まつりでの花火
[写真提供]住田町観光協会



住田町夏まつり
[写真提供]住田町観光協会



住田町夏まつり
[写真提供]住田町観光協会



住田町大感謝祭でのひとこま



住田町への感謝をこめて

住田町の皆様のご理解があり、私たちは住田町に拠点を置き、復旧・復興活動ができます。そこで、活動拠点であるトレーラーハウスを設置している住田町にて、2011住田大感謝祭を開催。ボランティアの皆さん、トヨタグループさん、コープあいちさんらと共に吉本興業グループさん、トーマンエレクトロニクスさん、気仙地区のNPOの皆さんなどのたくさんのご協力を得て、住田にお住いの皆さんへの感謝をお伝えするイベントを開催しました。また、同町内にて毎年開催される「住田町夏まつり」開催にあたっては、花火打ち上げへご協力させていただき、感謝の気持ちをお伝えしています。

「うごく七夕祭り」もサポート

陸前高田市で毎年開催される「うごく七夕まつり」。実行委員会へ、2011年は、オフィシャルグッズとなるTシャツ2,500枚、花火600セットを送りました。2012年は邑サポートの協力を得て、ブースを展開。愛知名物の手羽先や、きしめんを振る舞いました。2012年には住田町でも七夕が動きました。住田町の皆さんと、陸前高田ご出身の皆さんとがつくりあげた山車が、気仙を明るく照らしました。



住田町夏まつりで動いた山車



山車づくり



邑サポートさんの協力を得て、うごく七夕まつりでブース展開

温かいご支援に ただただ感謝の気持ち



大船渡商工会議所 副会頭
盛町夏まつり実行委員会 実行委員長

水野公正さん

3.11の大震災の直後は、例年8月の七夕祭りの開催など思いもよりませんでした。しかし町が少し落ち着きを取り戻した頃、94歳になる町の大長老が私に電話をくれまして、七夕祭りはお盆に先立ち先祖の霊をお迎えする大切な星祭りであるから、こういう悲しいことがあったときであればこそなお開催しなさい、というご指導でした。

大口の協賛企業は軒並み被災しても資金集めどころではありませんでしたが、そのことを聞きつけた愛知ネットの天野理事長が、私どもが応援しますから開催をと、多大なご支援をいただきました。そして安城市の七夕祭り実行委員会の紹介をいただき、七夕の資材を頂戴することができました。10台の七夕山車のうち2台が被災していましたが、1台は修理をし、去年も一昨年に引き続き温かいご支援を頂戴し、残り1台も制作することができました。何と感謝してよいかわかりませんが、ただただ感謝の気持ちだけです。

被災地の復興はまだですので、これからも見守っていただければありがたいと思っております。

震災と愛知ネットと私 ～七夕が繋いだ絆～



盛青年商工会 会長

門田晃明さん

すべての始まりは、震災直後に天野理事長率いる愛知ネットのボランティアグループが、住田町役場敷地内にベースキャンプを張ったことでした。開催の危ぶまれている「盛町灯ろう七夕まつり」の存在を知り、そして盛町夏祭り実行委員会にファーストコンタクトがあったのが2011年のGW直前でした。天野理事長から安城七夕協賛会を介して支援ご協力をいただいたことにより、盛町灯ろう七夕まつり2011の開催へと動き出しました。

愛知ネットが繋いだご縁はそれだけでは終わりませんでした。トヨタグループを始めとする愛知県の支援が、愛知ネットが受け皿となることによって広域気仙地区に集中したのです。それは真に、天野理事長の背中に向けて集まったが如く圧巻でした。

このご縁が末永く続くことが私の切なる願いです。今年の愛フェス2013には昨年同様、我が子とともに「愛ファザWALK」することを楽しみにしております。愛知ネット、天野理事長、2年間本当にありがとうございました。そして、これからもよろしくお願ひ申し上げます。

「あおぞら花月」プロジェクトで 勇気や元気をいただいた



よしもとクリエイティブ・エージェンシー
あおぞら花月担当 常務取締役

戸田義人さん

弊社では3.11の東日本大震災直後、社内では被災地のみなさんに少しでもお役に立てないか?何かできることはないか?を考えました。笑いを提供することは時期早尚ではないのかという意見もありましたが、実際に被災地を支援されている皆様から「そんなことはない、現場は落ち込んでばかりではいけない。笑いが必要です」との力強い要望をいただきました。私たちは「あおぞら花月」というプロジェクトを企画しました。ただ、実際に当社と被災地の皆さんを結ぶラインがなく、どこに笑いを提供すればいいのかと考えていたところ、愛知ネット様とご縁がつながり、7月と9月にタレント派遣プロジェクトを実施することができました。

被災地では、タレントだけでなくスタッフもあまりの惨状に声も出ない状況でしたが、子どもたちが笑うことで、親が笑い、さらに年寄りが笑うという状況で、現場に行ったタレント、スタッフは逆に勇気や元気をいただいたと申しております。愛知ネット様をはじめたくさんのボランティア団体様のご協力、100ヶ所以上にタレント派遣を実施することができ感謝しております。

震災から2年を振り返り 愛知ネットさんへ御礼を



住田町商工会 会長

高橋高志さん

東日本大震災で壊滅的な被害を受けた岩手、宮城、福島沿岸地域。気仙管内では、大船渡市、陸前高田市の両市が津波で中心部が破滅し、今、盛んに復興に向けてそれぞれの方々が一生懸命取り組んでいます。震災からのこの2年間を振り返り、ボランティアの方々の活動が大きく報道などにより取り上げられ、感謝しております。

住田町におきましても、毎年7月に行われている「すみだ夏まつり」でのフィナーレとして行われる「花火大会」に、ここ2年間多額の募金を愛知ネットさんよりいただき、より盛大なまつりとして、住田町民はもとよりたくさんの気仙地区の皆さんに喜んでいただき大変感謝しております。今後とも一層の支援をお願いいたしますとともに、これまでの活動・支援にお礼をさせていただきます。

支援から異文化理解、地域交流へ 「七夕」が二つのまちをつないでくれた



安城七夕まつり協賛会

小島祥次さん

「我々には、七夕がある。まつりがある」。震災が起こった直後、被災地の方々に何が出来るかを考えたとき、まずそれが浮かびました。そしてその思いを汲み取り、コーディネートしていただいたのが愛知ネットでした。

8月に盛町灯ろう七夕まつりが開催されることになり、安城からは七夕飾りの支援とボランティア派遣を実施。安城の人気行事である願いごと短冊と願いごとふうせんを現地でも行いましたが、驚いたのは、同じ七夕でも「願いごと」の安城と、「鎮魂」の盛ではバックボーンが異なることでした。盛の水野実行委員長が、5月の初対面の際に「津波で多くの命を失ったからこそ、盛大にやらなければならない」とおっしゃっていた意味が、山車をひき回す荘厳な光景を見てようやく理解できたような気がします。

2012年夏には、逆に盛の方々が安城を訪れ、七夕まつり会場で山車を披露していただきました。異文化の理解、そして地域交流。支援という枠組を越えた心のふれあいを体感できたことが、我々にとってもかけがえのない財産となっています。

2 ボランティア・コーディネイト

まつり支援と同時に進めた活動が、愛知県内の企業や学生の気仙地区におけるボランティア活動コーディネイトや、災害時相互応援協定締結のお手伝いでした。被災地の現状を肌で感じ、必要なことを応援したい。愛知から東北への想いを持つたくさんの方々と、気仙地区の方々とをつなぐ縁が、これからの復興への歩みを確かなものとすると思いました。

情報提供から宿泊手配まで トヨタグループの活動をトータルサポート

愛知ネットは、トヨタグループ15社<(株)豊田自動織機、愛知製鋼(株)、(株)ジェイテクト、トヨタ車体(株)、豊田通商(株)、アイシン精機(株)、(株)デンソー、トヨタ紡織(株)、(株)豊田中央研究所、豊田合成(株)、日野自動車(株)、(株)東海理化、愛三工業(株)、大豊工業(株)、トヨタ自動車(株)>が気仙でボランティア活動を行うにあたり、活動のマッチングや情報提供、宿泊先の手配などのサポートをトータルでお手伝いしました。

各社の支援と気仙を結ぶ

愛知ネットは気仙事務所を設置している利点を生かし、独自に大船渡市や陸前高田市の地元の方々からニーズを収集。ニーズをトヨタグループの皆さんとをマッチングし、必要とされる応援を進めました。また、被災地の今の状況を見て知ってもらうために、バスで気仙沿岸地域の見学や案内も実施しました。陸前高田市では、復興のシンボルとしてよく知られていた「奇跡の一本松」を。大船渡市では津波に耐えた千石船「気仙丸」の案内をしました。気仙丸は、気仙地区の気仙大工さんが昔ながら工法で造ったものとして有名で、大船渡を象徴するものでした。また「地元でお金を使うことも復興支援の一つになるのでは」との声を同グループの方が頂いたことを受けて、気仙地区でのお土産購入や、再開した飲食店での食事をしていただく際のコーディネイトも行いました。さらに、愛知ネットが先んじて気仙地区で活動していたことから、住田町の仮設住宅から「手伝ってほしい」という声があがった際にコーディネイトしました。仮設住宅周辺の側溝の溝掘り作業・泥上げ作業や草取りなど、お住いの皆さんだけでは手が回らない作業があることも分かってきました。そこで2012年度の活動において、お住いの皆さんのニーズと、同グループの皆さんの「より良くしたい」という想いのマッチングが実現しました。

震災発生直後から、トヨタグループ各社における支援活動が検討され、実施されています。愛知ネットは気仙地区におけるニーズの収集はもちろん、グループ各社のヒアリング調査の際のコーディネイトや、活動のマッチング等を通して、支援活動をお手伝いしています。2012年2月に気仙地区におけるヒアリングで得た情報をもとに、各社様々なアイデアや特色を生かした活動が継続して展開されています。例えば、トヨタ自動車(株)さんは、車両や収集したベルマーク、書き損じ葉書を寄贈されました。車両は仮設住宅にお住いの方の引っ越しの際に使用予定であり、ベルマークや葉書は気仙地区にある教育施設等で活用されます。例えば、(株)豊田自動織機さんは、気仙地区の小学校にて、世界で活躍する音楽家が演奏するコンサートを開催されました。子供たちに一流の音楽を届ける活動は、2013年度も継続されます。

支援活動は、愛知県でも展開されました。2012年10月開催のALLTOYOTABigHolidayにおいて、グループ各社が共同してボランティアプラザを出展されました。愛知ネットは同ボランティアプラザ内にて、ブースを出展し、気仙地区の物産品や復興支援グッズ、手仕事の商品を販売しました。また、さんままつり実施にあたってのコーディネイト活動を通して、地域連携による復興支援をすすめました。



大船渡市でのボランティア活動の様子



陸前高田市災害ボランティアセンターでのヒアリングの様子



トヨタ自動車(株)さんから車両提供いただきました



気仙地区広域社会福祉協議会である住田町社会福祉協議会へのベルマーク等の寄贈



豊田自動織機さんによるミニコンサートの様子



仮設住宅びお住まいの皆さんとともに作ったベンチの前に

風化させないためにも いかにマッチングしていくか

時間の経過とともにボランティアの数も減り、気仙地区のボランティアセンターも閉鎖されました。その中で「何かお役にたてることがあるだろうか」という想いと、気仙地区の皆さんの声とを考慮しながら、いかに適切にマッチングしていくかが今後の課題です。東日本大震災を風化させないためにも必要なことだと考えています。



陸前高田市の七夕について説明を受けるボランティアの皆さん

行政間の相互応援協定をサポート 幸田町では防災シンポジウム開催

震災をきっかけに、各市町単位によるボランティアバス派遣だけでなく、行政間における相互応援協定を結ぶ動きができました。災害時における相互応援の協定が2012年7月に岩手県住田町と、愛知県幸田町との間で締結されました。愛知ネットは締結のコーディネートを致しました。これで、どちらかの町で災害が発生した際には相互に応援するという約束が整いました。2012年11月23日には、幸田町にて災害時相互応援協定の締結記念として、幸田町防災シンポジウムが開催されました。住田町を含む各県の市町(長野県上伊那郡箕輪町、岩手県西磐井郡平泉町、東京都立川市)の紹介や、有識者や住田町長が登壇するパネルディスカッション「大規模災害における対策と支援～東日本大震災から～」が実施されました。



幸田町防災シンポジウムの様子

愛知県内の学校・大学による ボランティア活動を応援

愛知県内の学校・大学において、意欲をもち活動したいと考える皆さんが沢山います。愛知ネットはその意欲と気仙の皆さんとをコーディネート。「今、必要とされる活動は何か」を活動する皆さんが考え、大船渡市でのイベントのお手伝いや、住田町仮設住宅での花壇づくり、ベンチのニス塗り、子どもたちを対象とした企画や花火大会などが企画され実施されました。また、愛知学泉大学におけるさんままつり実施にあたってのコーディネートなど、愛知県における学生や大学の皆さんのボランティア活動も応援しました。



震災発生時の様子を聞くボランティアの皆さん



愛知学泉大学でのさんままつりの様子

気仙地区とのお縁を大切に 2013年も支援活動を継続



トヨタ自動車株式会社
社会貢献推進部

大洞和彦さん

オールトヨタ社会貢献活動連絡会を構成する15社は、愛知ネットの強力な支援の下、岩手県気仙地区（陸前高田市、大船渡市、住田町）で、2011年6月から2012年11月まで、24回に渡って活動をさせていただきました。社員ボランティアは、愛知県から岩手まで片道900kmの道のりをバスで約14時間かけて移動し、4泊5日の日程で、津波の漂流物の片づけや、床下や側溝の泥出し、瓦礫の撤去などの現地のニーズに即した活動を行いました。

岩手で活動をするきっかけは、2011年4月に愛知ネットが住田町に支援のための拠点を置いたことです。愛知ネットに作っていただいたご縁によって、2年で359名の社員が岩手に赴き、活動だけではなく、気仙地区の皆さんとの温かな交流を通じて、心に多くの思いを残しました。この復興への思いを風化させることなく、2013年も気仙地区とのお縁を大切にして、支援活動を継続していきたいと考えています。

全国の皆さんの温かなお心遣いが 私たちの励みに



鎌田水産株式会社
代表取締役社長

鎌田仁さん

まずはじめに、東日本大震災で壊滅的被害を受けた大船渡ですが、支援団体、ボランティアさん、行政機関と、多くの皆様に支えられ今日を迎えることができておることに、心

より感謝申し上げます。

私自身、東日本大震災発災により、幸い自宅も家族も無事でしたが、海沿いで営んでいる水産加工会社や所有していたさんま船など被災し、その惨状に言葉を失いました。しかし、大船渡は水産のまち。水産業の復活なくして大船渡の復興はないと、会社再開に尽力しました。2011年、大船渡港のさんまの水揚げ高は例年の4割減でしたが、昨年2012年は全国第2位の水揚げ高。まだまだ津波の傷痕が残っている状況ですが、まことに元気を取り戻すため、地元の関係者がさんま受入れに必死となった結果だと思っています。

震災後、全国各地で「大船渡さんまつり」が開催されました。また、各地のお祭りやイベントで当地の水産加工品、菓子など被災地の物産を取り扱っていただいております。特にトヨタグループさんにおかれましては、昨年、一昨年と気仙地区にボランティア活動にお越しいただき、活動終了後に当社への訪問、社屋の前に停泊している奇跡的に残った千石船「気仙丸」の見学などいただきました。また「被災地商品の購入で復興支援」ということで、お土産品もさまざま購入してくださったとお聞きしておりました。

全国の皆さんが、さまざまな形で私たちを盛り立ててくださっています。そのような温かなお心遣いがとても心強く、私たち水産・水産加工業に携わる者の励みともなっております。皆様のご厚情におこたえるためにも、今後とも一歩一歩進んでまいります。本当にありがとうございました。そして、これからもよろしくお願い申し上げます。

愛知の皆さんが お手本でありエネルギー



にじのライブラリー
現地責任者

荒木そうこさん

仮設子ども図書館「にじのライブラリー」は、23年11月の開設から愛知の皆さんには継続的にご支援いただき心から感謝しております。トヨタグループさんには、避難路や花壇、館内の整備をお手伝いいただきました。愛知学院大学の学生さんや安城市の子どもたちには、自分のあり方、日本の未来をどのようにしていくのか一緒に考える機会をいただきました。

震災から間もなく2年、復興は順調に進んでいるとはいえない状況です。気力が萎えそうになることもあります。愛知の皆さんと作業したことを思い出すと「焦らず一歩一歩確実に歩もう」と思いを新たにすることができます。「逆の立場であったらあのようにボランティアができるだろうか。いつか必ずお礼を」と気仙の人々は思っています。皆さんが私達のお手本になり、エネルギーになっています。これからはお友だちとして末永く繋がってくださるとてもうれしいです。

愛知ネットの皆さん、素晴らしいご縁を本当にありがとうございました。今後とも気仙と愛知の懸け橋としてよろしくお願ひいたします。

今日まで歩んでこれたのは ボランティアさんの姿に励まされたから



碁石給食株式会社
常務取締役

濱守秀和さん

東日本大震災以降、全国各地から多くのの方々より、物心両面にわたりご支援をいただいておりますことに衷心より感謝申し上げます。

私は仕出し業を営んでおり、幸いなことに本社工場は津波の被害を免れました。震災直後「自社でできることは何か」と思い、沢で水をくみ、木材をかき集め、米や野菜を使い炊き出しを行いました。数日間は避難所におにぎり等を作っていたのですが、消防や東北電力の方々食べられていないことを知り、そちらにも炊き出しを行いました。その後、商売再開するに至ったわけですが、各地からお越しいただいたボランティアさんから弁当の注文を頂戴するようになり、特に2年間に渡りトヨタグループさんの昼食は弊社にご依頼いただいております。

この2年間、実に多くのボランティアさんがさまざまな活動をしてくださいました。その姿に私達は励まされ、今日まで歩むことができました。本当にありがとうございました。復興にはまだまだ時間がかかりますが、魅力ある大船渡にしていくためにも一歩ずつ進んでいきたいと思っております。

3 現地雇用

地域連携を進めるうえで、現地の感覚がわかり、私たちの活動目的を理解してくれる存在、ともに活動してくれる存在なくしては、本当に必要とされる支援はできません。そこで、緊急支援時に出逢った大船渡市在住の2名をスタッフとして雇用。2名それぞれの持ち味を發揮し、活動をすすめています。

2名の女性を現地雇用 経験とノウハウを復旧・復興に活かす

現地で雇用した2名は、これまでの経験やノウハウを活かして活動しています。ひとりとは、気仙地区の市民活動団体を調査した経験があり、自身も市民活動の担い手である佐藤恵美子です。地元の市民活動団体をよく知る心強い存在。コミュニティづくり、ボランティア宿泊拠点(住田基地)の運営応援、浜のミサンガ「環」の生産管理などを担当しました。

もうひとりとは、東京で議員秘書経験があり、出身の大船渡においてさまざまなまちづくり活動に携わっている佐藤優子です。まちづくり組織や地元企業、行政機関とつながり、復興の応援を進めています。大船渡市盛町での七夕まつり、愛フェス2011・2012への気仙地区の皆さんのご招待、トヨタグループのボランティア活動や各社からいただくご支援の際のコーディネートなどを担当しています。



**愛知ネットに出会い、
大好きな大船渡で
郷土再興のために活動中**
愛知ネット気仙事務局 事務局員
佐藤優子

東日本大震災で大船渡市内の企業は軒並み被災し、従業員は解雇、郷里に留まりたくても仕事がない状況でした。私も自身の生活のため、断腸の思いで相模原への転勤をしました。その後、知人の紹介で愛知ネットの理事長天野に出逢い、「うちで一緒に働かないか」と声をかけてもらいました。悩みもしましたが「今こそ戻るとき」と大学を退職し、2011年7月から愛知ネットの職員として地元気仙で活動をさせていただいております。

現在は、愛知県の皆様、大学様、そしてトヨタグループ様からの心強いご支援を気仙へ届けるべく、橋渡し役をさせていただいております。愛知ネットに出会い、大好きな大船渡に帰ってくることができました。そして今、郷土再興のため活動できております。

津波は、かけがえのないものを一瞬にして奪い去りました。しかし、たくさんのご縁を運んできました。震災直後から現在に至るまで、国内外から暖かなお気持ちを寄せていただいていることに感謝をしつつ、このご縁を大切にしていきたいと思っております。



「浜のミサンガ」生産管理に携わった佐藤恵美子さん(右端)



**愛知ネットで活動したことが
今も役立っている**

愛知ネット気仙事務局 スタッフ
佐藤恵美子

2011年4月4日に愛知ネットと協働で震災復興に向けて活動を展開することになった。翌日には、「気仙復興連絡協議会」が発足し、愛知ネットと現地の市民活動団体・活動家のつなぎ役をした。毎日、事務所は先客万来で、つば防災科学研究所からはPC100台やコピー機などの機材が送られてきた。トヨタ自動車幹部が現地視察に訪れニーズの把握に奔走していた。コープ愛知からは、炊き出しの食材が提供され、いち早く被災地に食事を提供していただいた。合わせて心のケアセンターも開設し、臨床心理士チームを1年間常駐派遣し続けた経緯を鑑み、千里眼的発想に目を見張る思いでいた。そのような中、6月2日より、住田町基地ボランティア宿泊施設の運営スタッフとして参加。毎日、全国から沢山のボランティアが訪れ宿泊していた。日を追うごとにその輪がネズミ算式に増えていき、施設は毎日その対応に追われ大変な状況だった。8月より、住田町応急仮設住宅の支援活動が本格的に始まり、住田町役場・社協や邑サポートと協働で、高校・大学生のボランティア活動サポートや自治会運営のお手伝い、声かけ巡回しながら現場の問題やニーズの把握に奔走していた。9月に入り、天野理事長から「被災者への自立支援に向けて」の提案があり、三陸に仕事を！プロジェクト「浜のミサンガ(環)」の生産着手に向けて準備を始めた。10月より生産がスタートした。愛知県から注文が殺到した。作り手の皆さんは、歓喜に燃えた。自分の作ったものが売れ、賃金を貰う喜びを知った。一方で、クオリティーの向上に努めた。みんなで励まし合いながら頑張った。

2012年6月末、宮城県セキスイハイムスタジアム「オールトヨタ感謝祭」出演の依頼があった。加藤茶さんと大神いずみさんと浜のミサンガ作り手と一緒に3,000名を目の前に、ミサンガPR宣伝活動をした。その経験を最後に、愛知ネットを退職した。その後ジャパングリエートに入社し、北上市と大船渡市協働・仮設住宅支援事業の本部事務局として活動している。

大船渡市各仮設住宅仮設支援員が、2012年7月より2人体制になり、欠勤対応の任務に就いた。支援員同志のトラブルや心のケア、仮設内のクレーマー処理や情報を本部と共有しながら、さまざまなニーズの対応と問題解決の糸口を見出していた。いま、臨床心理士による仮設支援員の「心のケア」が一番の課題のようだ。仮設住宅では、お茶会や仮設運営のし方がテーマのようだ。愛知ネットで活動したことがここで役に立っている。

震災当初から、自立支援・心のケア(臨床心理士導入)・復興支援を念頭におきながら、愛知県からたくさんボランティアを注入し続けた鉄の人脈に驚いた。常にアクションを起こしていた。「お節介にならないように」が口癖だった。「何のため」を問いかけながら、1つひとつの課題に取り組んでいた。大変にお世話になり、ありがとうございました。